

日本保険医学会誌

第108巻 第1号

平成22年3月

目次

論文

- Epidemiology—Changes in disease patternsDetloff Rump... 1
 早期乳癌の診断と乳癌チーム医療.....芝 英一, 他... 8
 いわゆる非特異的ST-T変化の意味するもの三石洋一, 他...15
 余命分布という考え方.....白石光弘, 他...27
 余命分布と死亡指数の関係.....川野 博, 他...32
 期待在院日数比解析のための生存時間分布.....宮副一郎, 他...39
 短期入院欠測データの推定修復による入院リスク解析法.....宮副一郎, 他...54
 特定疾病保険の標準体における肺の悪性新生物罹患リスク.....加藤慎二郎...70
 C型肝炎ウイルスキャリアの死亡・入院リスク評価
 —修正Markovモデルによる相対リスク推定—清水宏一...85

学会より

- 第107回日本保険医学会定時総会の演題募集について.....103
 日本保険医学会認定医の認定試験について104
 国際渉外からのお知らせ105
 支部だより108



日本保険医学会

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/alimj/>

早期乳癌の診断と乳癌チーム医療

大阪プレストクリニック

芝 英 一
山 本 仁子
高 原 祥 子

要旨：近年日本人の乳癌罹患数は飛躍的に増加し、そのため乳癌死亡数も増加している。乳癌は早期に発見し治療すれば比較的治癒しやすい癌種で、早期発見のためには乳癌検診が重要である。本邦では2000年よりマンモグラフィ検診が導入され、乳癌発見率も増加している。乳癌を早期に発見するためには、医師、マンモグラフィを撮影する診療放射線技師、エコー検査を担当する超音波検査技師の連携（チーム医療）が重要である。また、種々の新しい診断機器の存在も重要で、非浸潤癌の多くを占める石灰化病変の診断にはステレオ下マンモトーム生検装置が必須である。非触知の腫瘍性病変の診断にはエコー下マンモトーム生検の装置が必須である。

キーワード：早期乳癌、乳癌診断、乳癌チーム医療

はじめに

乳癌は世界的に増加を示し、わが国でも乳癌の罹患率は約15年前に胃癌を抜いて女性癌の第一位となった（図1）。その後もますます増加し、胃癌の罹患率の約2倍に迫る勢いで増加している。日本人の2000年の乳癌罹患数は約35,000人（1970年の約3倍）で、それにつれて乳癌死亡数も年々増加し、年間約10,000人（1955年の約6倍）にもものぼっている（図2）。この数字は日本人女性の20人に1人が一生のうちに乳癌に罹患する計算となる。しかしこれは欧米先進国の8人に1人が罹患する頻度よりはるかに低い。日本では死亡率も増加しているのに対して、欧米では逆に死亡率は1990年の半ばから減少に転じている（図3）。これは欧米

では乳癌に対する関心が強く、マンモグラフィを用いた乳癌検診を精力的に行い早期発見に努めていることや、乳癌術後の補助療法（内分泌療法・化学療法）の進歩により、再発が低下したことによると考えられている。乳癌検診は乳癌を早期に発見し、治癒しやすい状態で治療を開始できることから非常に重要と考えられている。

もう一つの乳癌の特徴として挙げられるのが、好発年齢が他の癌腫に比べて若年であることである。乳癌は30歳を過ぎてから罹患数が増加し、そのピークは40歳代後半から50歳前半である（図2）。この年代の女性は家庭では、家事や子育てで重要な役割を担っていると同時に、社会でも働き盛りの年代である。このような世代の女性が罹患すると、入院、手術、手術